

親鸞における「信」の姿

— 初期親鸞の一考察・

《自己の救い》から《他者の救済》へ —

今 泉 晴 行

The figure of the beginning period at SHINRAN

Haruyuki Imaizumi

はじめに

昨今、なにかと宗教のことが話題になることが多い。それも宗教の示す狭量性が口頭に上ります。確かに宗教には、自己の存在すべてを委ねるものである以上、「自己の邂逅した宗教の《絶対性》」という問題が付随してきます。それも人間一人ひとりの生命の一回性を思うとき、それぞれが出会った宗教の優越性にこだわるのは理解できる気がします。

しかし、それが宗教、信仰を異にする人々に対する排他性に繋がり、やがて敵意さえ示すこともあります。なかには、その存立、存在さえ認められないと言い出すことも出て来ます。

眼を世界に向けると、それは一目瞭然です。また、日本においても、宗教間ばかりでなく、宗派のあいだでの諍いは、昔から見ることができます。日本も、これから一層の地球化の波に巻き込まれ、さらに、宗教を異にする人々、民族の違う人々と共に生きていかなければならない状況が出てくると思われます。

その中で、私たちは、古来の伝統文化のなかだけに止まっていて良いのかと考えてしまいます。そして、宗教の異なる人々、生活習慣の異なる人々と共に生きていくことで、みづから信じている宗教が本来持っていた豊かさに、今まで以上に、あらたに気づかせてくれることになるとおもいます。

I

『恵信尼文書』が物語るように、親鸞は少なくとも二度に亘り、経を読む「心へぬ事⁽¹⁾」という、既に脱ぎ捨て、乗り越えたはずの旧態の《信》の残滓を表出させた。道綽により厳しく批判されたことは、法然を通して当然熟知し、その教えの下に《自力》を越えて救われたはずの親鸞が、何故、このような後振り返る《自力》に繋がる残映を垣間見せたのだろうか。

先ず、親鸞の振る舞いを、弘長三年二月十日付けの『恵信尼文書』に即してみていきたい。

「ぜんしんの御房、くわんぎ三年四月十四日むまの時ばかりより、かざ心ち、すこしおぼえて、

そのゆふさりより、ふして大事におはしますに、こしひぎをも、うたせず。てんせい、かんびやう人をもよせず、たゞ、おともせずして、ふしておはしませば、御身をさぐれば、あたゝかなる事、火のごとし。かしらのうたせ給事、なのめならず、さて、ふして四日と申あか月、くるしきに、まはさてあらんと、おほせらるれば、なにごとぞ、たわごととにや申事かと申せば、たわごとにてなし、ふして二日と申日より、大きやうを、よむひまもなし、たまたまめをふさげば、きやうのもんじの、一時ものこらず、きららかに、つぶさにみゆる也。」

「くわんき三年」とは、寛喜三年を指す。この寛喜三年の前の年は、史上稀にみる冷夏で、陰暦六月に雪が降るといふほどの異常気象の年であった。

『吾妻鏡』寛喜二年六月十六日の条に、

「就中當月白雪降事。少其例敷。孝元天皇三十九年六月雪降。其後歴二十六代。推古天皇御宇三十四年六月大雪降。亦歴二十六代。醍醐天皇御宇延長八年六月八日大雪降。皆不吉也。今亦經廿六代。今月九日雪下。上古猶以成奇。況於末代哉。」

という記述がみられる。

当然の結果、その年の農作物は不作であった。

翌年、寛喜三年に、親鸞は「大きやう」、即ち大経一無量寿経を、「よむことひまなし」という事を行ったのである。やはり吾妻鏡廿八、寛喜三年の個所に以下のような記述が見られる。

「三月十九日乙巳。

今年世上飢饉。百姓多以欲餓死。仍武州。伊豆駿河兩國之間施出舉米。

可救其飢之由。

以下 略」

死に逝く民衆を眼の当たりにして、親鸞が何を感じたか。平静でいられなかった事だけは間違いのない。

『恵信尼文書』の前条に、さらに次のような記述がつづく。

「さてこれこそ心へぬ事なれ、念仏の信じんよりほかには、なにごとか、心にかかるべきと思て、よくよくあんじてみれば、この十七八ねんがそのかみ、げにげにしく三ぶきやうをせんぶよみて、すぎうりやくのためにとて、よみはじめてありしを、これはなにごとぞ、じゝんけう人しん、なんちうてんきやうなむとて、身づから信じ人をおしへて信ぜしむる事、まことの仏おんを、むくゐたてまつるものと信じながら、みやうごうのほかには、なにごとのふそくにて、かならず、きやうをよまんとするや、と思かへして、よまざりしことの、さればなほも、すこし、のころところのありけるや、人のしうしん、じりきのしんは、よくよくしりよあるべしと、おもひなしてのちは、きやうよむことは、とゞまりぬ。さて、ふして四日と申あか月、まはさてあらんとは申也と、おほせられて、やがて、あせたりて、よくならせ給て候し也。⁽¹⁾」

加えて文末には、「しんれんぼう（信蓮房）は、日つじ（未）のとし、三月三日のひに、む（生）まれて候しかば、ことし（今年）は五十三やらんとぞおぼえ候。」と明確に記されている。

この書簡が記されたのは、文尾の日付によれば、弘長三年二月十日、そして、この年に五十三歳である「しんれんぼう」が四歳の時というのは、四十九年前。即ち、「ぜんしんの御房（親鸞）」が三部経千部読誦を心したのは、1214年、建保二年のこととなる。そして、それ「しんれんぼう（信蓮房）の四のとし（年）、むさし（武蔵）のくに（国）やらん、かんづけ（上野）のくに（国）やらん、さぬき（佐貫）と申すところにて」である。熱に魔されながらも、衆生利益のために三部経を千部誦も

うと試みるが、「これはなにごとぞ」と言い、善導の「往生礼讃」に記されている「自信教人信、難中転更難」と口にし、みづから信じ、ひとにも伝えることの難しさは極まりないと我が身を振り返り、「四五日ばかりありて」、「みやうごう（名号）のほかには、なにごと、ふそく（不足）にて、かならず、きやう（経）をよ（誦）まんとするや」と、思い返して止めた。「よま（誦）ざりしことの、さればなほも、すこし、のこ（残）るところのありけるや、人のしうしん（執心）、じりき（自力）のしん（信）は、よくよくしりよ（思慮）あるべしと、おもひなしてのちは、きやう（経）よ（誦）むことは、とゞまりぬ。」それは、越後から常陸への旅の途上、上野国佐貫庄においてであった。

何故、この地において、親鸞は三部経千部読誦を試みたのか。

確かに越後の地も、親鸞配流二年目は天候不順のため不作で、貢納が叶わないとの上申がなされた（平野団蔵著「越後と親鸞・恵信尼の足跡」p 122, 141）ほどであった。越後に於いてではなく佐貫で、三部教読誦を始めたのは、上州、もしくは、その地までの旅の途上に於ける見聞に触発されてと考えられる方が妥当ではないだろうか。

『吾妻鏡』には、以下のような記載が見られる。

第廿二、甲戌、建保二年

「(五月) 廿八日壬辰炎干依涉旬。於鶴岳宮被行祈雨御祈云々。」

「六月三日丙申。霽。諸国愁炎干。霽仍將軍家屈葉僧正。

為祈雨持八戒轉讀法花經給。相州已下。鎌倉中緇素貴賤讀誦心經。

一心潔信而被到精勤之誠也。

この年は降雨が少なく、鎌倉の鶴岡天満宮で祈雨が行われたという記述がみられる。関東の地においても日照りの日が続き、水飢饉の所為で作物不作に苦しむ人々が続出したであろう。とりわけ関東では、西国とは異なり、極めて過酷な隷属的支配の下に置かれていた（笠原一男「親鸞」p.101）故、その悲惨さも極まっていたであろう。親鸞も旅の先々で民衆の苦悩を目の当たりにしたことは想像に難くない。生命をつなぐ作物の実りのため、親鸞の三部経読誦も降雨を願っての試みといえるだろう。

善導が観経疏卷四に記しているように、三部経の読誦は、念仏と共に浄土に往生するための正行と見做され、また、法然も「玉葉」に記されているように、病を癒し、邪気を祓うために、九条兼実の招請を幾度も受けた。それは法然の「やさしさ」でもあった。『選択集』で明確に専修念仏を説く法然は、求められれば、それに応じた。一般に、経を数多く読むことで、慈悲を希（こいねが）い、救いを求めるということは時代の習いでもあった。そして、「衆生利益」のための三部教千部読誦という行為そのものには、当時、法然の門弟のあいだで、不自然なこととは考えられていなかった。しかし、親鸞はそれさえも「名号のほかには何の不足があるのか」と打ち切ったのである。親鸞が我が身を振り返って思い直したように、確かにその発想の底には加持祈禱に繋がるものを見ることができる。そして、そこに「自力」の残滓を読みとることができる。この『消息文』は、笠間以前における親鸞の「信」の深まりの一断面を垣間見ることができ、興味深いものがある。

しかし、またこの『恵心尼消息文』が伝える事象を、別の視座から考察すると、親鸞の「信」の有り方の異なった一側面を見ることができる。「殿のひへのやまにだうそうつとめておわしましける」⁽²⁾ 折りには見られない他者への思いを知ることができる。自己の後世の救済だけに一意専心していた比叡山堂僧である親鸞を伝える「親鸞夢記」には見られない心情の変化、精神の拡がりを知ることができる。

II

比叡山堂僧としての親鸞を知る資料は数少ないが、ここでは『恵心尼消息文』で見えていくことにする。

「去年の十二月一日の御ふみ⁽³⁾」で覚信尼は親鸞の往生を告げた。その「往生」を知らせる書簡に応じて、年が明け、二月十日付けで恵信尼が綴った消息文に、往時、親鸞から伝え聞いたであろう、若き日の親鸞の姿が記されている。

「やまをいでゝ、六かくだうに百日こもらせ給て、ごせをいのらせ給けるに、九十五日の、あか月、しやうとくたいしのもんをむすびて、じげんにあづからせ給て候ければやがてそのあか月いでさせ給て、ごせのたすからんずるえんにあいまいらせんと、たづねまいらせて、ほうねん上人にあいまいらせて、又六かくだうにこもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにも、いかなるだい事にもまいりてありしに、たゞごせの事は、よき人にも、あしきにも、おなじやうに、しやうじいつべきみちをば、ただ一すぢに、おほせられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば、しやうにんの、わたらせ給はんところには、人はいかにも申せ、たとひあくだうに、わたらせ給べしと申とも、せゝしやうじやうにも、まよひければこそありけめとまで思まいらすみなればと、やうやうに人の申候し時も、おほせ候しなり。⁽²⁾」

親鸞は、比叡山の堂僧として、様々な教典に対する知識を重ね、学び修めていた。しかし、この文面から、学び修めた学業、修行の数々に、求めるものを得られぬ心みたされなさを覚え、自己の在り方を問い直す、切迫した魂の焦燥感をいだきつつける苦悶の日々を送っていた背景が読みとれる。

その焦燥感の因は、この消息に明らかに記されているように、「ごせをいのらせ給いける」、即ち、「後世」の救済の渴仰である。親鸞の焦眉の急は、「ごせ（後生）」における救いであった。修行僧として、「ごせのたすからんずるえん」を求め、後世の救済をひたすら考えていたことが知られる。ここに記されている聖徳太子の「もん」が厳密に何を意味するか、聖徳太子廟窟偈説など諸説入り乱れているが、やはりこの個所は、恵心尼の文脈から判断して聖徳太子の言葉と受け取る方が自然であろう。

それでは、その「聖徳太子の言葉とは何か」という問題が生じてくる。高田専修寺に伝わる「親鸞夢記云」で始まる「建長二年文書」と呼ばれる文書が残っている。この文書には、「干時建長第二庚戌四月五日 愚禿釋親鸞七十八歳書之」という奥書を具えている。親鸞の若き日の異なった時期に受けた三個の夢告を並べて記載された文書である。この文書に関して、明らかに親鸞真筆ではないものの、非偽作、偽作が論議されているが、このなかの冒頭に「磯長の夢告」といわれる記述がある。

「建久二年辛亥暮秋仲旬第四日ノ夜

聖徳太子善信ニ告勅ノ言ク

我三尊化塵沙界　　日域大乘相應地
諦聴諦聴我教令　　汝命根應十餘歳
命終速入清浄土　　善信善信真菩薩」

以上のような文書がある。この文書の真偽諸論あるが、このなかでも「汝が命根は、残り十余歳である」と告げられている。恵心尼の消息文にも、「ごせ（後世）をいの（祈）らせ給て」とある点だけから見ても、両者は符節を合わせてはいる。

いつれにしても、後世の救済を始め自己の生命の事柄が、絶えず親鸞の脳裏から離れなかったことには違いない。その親鸞の胸中には、いまだ他者が介在する余地は見ることができない。

III

前節で見てきた恵心尼の消息文に記されていた、聖徳太子の言葉を口にして、参籠した結末に、親鸞は「九十五日のあかつきの御じげんのもん」を授かり、六角堂を出、手探りで様々に尋ね求め、その結実として「ほうねん上人にあいまらせて」という出会いに到る。親鸞は、そこでも六角堂に百日参籠したように、雨の日も晴れの日も、如何なる事がある時でも、必死に法然のもとに参上した。そして、「善人にも悪人にも、ただ生死を越え救われる道をひたすら説く」法然のおしえを聞き、「上人がおいでになるところなら、たとえ悪道にでもお供する」ほどに法然を信じ、「その門に連なる」ことを心に決めた。

この時の心境を、

「しかるに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の曆、雑行を捨て、本願に帰す。」

建仁辛酉の曆、即ち建仁元年、1201年、親鸞二十九歳のことであった。

また、後年、弟子の問いかけに応え、みづからの昔日を振り返り語る親鸞の言葉を、直弟子唯円は「歎異抄」のなかに伝えている。

「親鸞にをきては、ただ念仏して彌陀にたすけまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、そうじてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄におちてさふらふはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

勿論、親鸞の謙遜、また、逆説的な批判もあることだろうが、比叡山での様々な修行もできないこの身にとって、ひたすら法然を信じ、念仏するしかないと語る。それも「たとい法然聖人にすかされまひらせて、地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と言うほどに、法然を、真から信じ切ったのである。

そして、また、先に記した教行信証の続きに、以下のような記述が見られる。

「元久乙の丑のとし、御恕をかうぶりて選擇を書しき。おなじきとし、初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の内題の字、ならびに南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本と、釋の綽空の字と、空の眞筆をもてこれをかゝしめたまひき。おなじき日空の眞影まうしあづかりて、圖畫したてまつる。

おなじき二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆をもて、南無阿彌陀佛と

若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、

若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛、

當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生

の眞文とをかゝしめたまひき。またゆめのつげによりて綽空の字をあらためて、おなじき日御筆をもて名の字をかゝしめたまひおはんぬ。本師聖人、今年七旬三の御としなり。

選擇本願念佛集は、禪定博陸（月輪殿兼實。法名、圓照。）の教命によりて選集せしめたまふところなり。眞宗の肝要、念佛の奥義、これに撮在せり。みるものさとりやすし。まこと

にこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。」

親鸞の喜びが伝わるような記述である。法然の門に入って四年目、元久二年、即ち、1205年に法然七十三歳の時、『選択本願念佛集』の筆写を認可されている。弟子の中でもとりわけ少数の者しか許されず、親鸞はそのうえ『選擇本願念佛集』の表題、《南無阿彌陀佛》、そして《綽空》を、法然に手ずから書いてもらったのである。

IV

それでは、法然自身は、いかなる思念を持っていたのであろうか。法然が撰述した『選択本願念佛集』の冒頭に、

「南無阿彌陀仏一往生の業には念仏を先とす」

と記されている。また、

「念仏は易きが故に一切に通ず。所行は難しきが故に諸機に通ぜず。しかれば則ち一切衆生をして平等に往生せしめむがために、難を捨て易を取りて、本願としたまふか。もしそれ造像起當塔をもって本願とせば、貧窮困乏の類は定んで往生の望みを絶たむ。しかも、富貴の者は少なく、貧賤の者は甚だ多し。もし、知慧高才をもって本願とせば、愚鈍下智の者は定んで往生の道を絶たむ。しかも智恵の者は少なく、愚痴の者は甚だ多し。もし多聞多見をもって本願とせば、少聞少見の輩は定んで往生の望を絶たむ。しかも多聞の者は少なく、少聞の者は甚だ多し。もし持戒持律をもって本願とせば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たむ。しかも持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行、これに準じてまさに知るべし。」

佛の像を作り、塔を立てる事で救われるなら、普段の生活に困窮している貧しい者は、救われる希みがまったくないことになる。智恵を持ち能力に恵まれた者が救われるなら、そうではない人々はどうすればよいのか。世の決まりを守り罪を犯さない人が救われるのなら、罪を犯した人は絶対に救われないのか。そして、世の中には、富んだ者は少なく貧しい者は多く、賢い者は少なく愚かな者は多く、罪を犯さない人は少なく罪を犯した人は多い。

このように語る法然の教説に、親鸞がいかに救われた想いがしたか想像に難くない。実際、死の二年前、文応元年、八十八才の時に、常陸国の乗信に宛てた、十一月十三日付けの書簡のなかに、その片鱗を見ることができる。

「故法然聖人は『浄土宗の人は愚者になりて往生す』と候しことを、たしかにうけたまはり候しうえに、ものもおほえぬあさましき人々のまいるたるを御覧じては、『往生必定すべし』とて、えませたまひしをみまいらせ候き。ふみさたして、さかさかしきひとのまいるたるをば、『往生はいかゞあらんずらん』と、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり。」

二十九才から三十五才の間に経験したことを、八十八才に到るまで抱きつづけているとは、いかに親鸞を救い、その琴線に触れた言辞であったか、そして、いかにその後の親鸞を形作り、支えていったかを知ることができるのである。

法然は、四十三歳の時、善導の『観経疏』の一節に眼を開かれ、選修念仏に帰依した。『選択本願念佛集』、「善導和尚、正雑二行を立てて、雑行を捨てて正行に帰するの文」のなかにも記している。

「一には一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問はず。

念念にすてざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に。」

永年の彷徨の末、法然が必死で希求していたものは、法然が知らないうちに、既に阿弥陀如来が「本願」として準備していたことを知り、諸行を捨て念仏に専修した。そして、学修したのは、あらゆる「末法の衆生」の救済のための「本願」であった。法然も、やはり、自己の救済を求めての道であったが、しかし、阿弥陀の本願を知り、「一切衆生を平等に往生せしむがために」であったことを学ばず、念仏は、「これ男女貴賤、行住坐臥を簡はず、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず」ことを知った。

そして、法然は、みづからの永い彷徨の末に学んだことを、当然その門弟たちに伝えたのである。

V

堂僧としての親鸞は、念仏行を唱えた源信の流れを引く常行堂で「念仏」には馴染んではいた。比叡山の堂僧として課せられていた「行」は、みづからが満足するほどに果たせず、求めるものは未だ捉えず、焦慮のなか暗闇を手探りする日常であった。そして、六角堂での参籠の末、法然を 探し当てたのである。法然の吉水での専修念仏に身を投じた。そこでは当然、法然の指導の下、「自力」聖道門を離れ、念仏者となった。親鸞は法然との邂逅によって救われたのである。そして救われた実感は、親鸞晩年の消息の中に多く見られる。

「真実信心の行人は、撰取不捨のゆえに正定聚のくらゐに住す。

このゆへに、臨終まつことなし、来迎たのむことなし。」

『建長三歳辛亥閏九月廿日 愚禿親鸞』

また、『唯心抄文意』三のなかでも

「コレヲ真如実相ヲ証ストモマフス。牙為法身トモイフ、
滅度ニイタルトモイフ、法性ノ常楽ヲ証ストモマフスナリ、
コノサトリヨウレバ、スナワチ大慈大悲キワマリテ生死海ニ
カヘリイリテ普賢ノ徳ニ帰セシムトマフス。」

述べている。

そして、一旦救われた経験をした親鸞は、その視線が他者に向くようになっていった。越後に於いても、鳥屋野周辺には、親鸞の旧跡と言われるところが残り、親鸞にまつわる伝説などもあり、たいへん興味深い。例え伝説にしろ、かつては自己の救済だけしか念頭になかった親鸞が、他者に向かった片鱗ともいえる。

また、実際に親鸞が残した、「正像末和讃」五十七に、自己以外の他者の救いに向かう親鸞の姿がみられる。

「他力ノ信心ウル人ヲ

ウヤマヒオホキニヨロコベバ

スナハチワガ親友ゾト

教主世尊ハホメタマフ」

同じく、五十八でもその動機を知ることができる。

「如来大悲ノ恩徳ハ

身ヲ粉ニシテモ報ズベシ

師主知識ノ恩徳モ

骨ヲ碎モ謝スベシ

已上正像末之三時 弥陀如来和讃

法然の人となりとその教説に惹かれ、自己の救済を果たした親鸞は、自己にだけ止まらず、その救いを「衆生」に伝えるためはたらき始めることになったのである。

資料

教行真証 親鸞著	金子大栄校訂	岩波書店	2000年12月5日	第44刷発行
親鸞全集		春秋社	2001年6月10日	新装第一刷発行
新訂増補國史体系	吾妻鏡	吉川弘文館	昭和60年8月10日	発行
教行信証 親鸞著	金子大栄校訂	岩波書店	2000年12月5日	第44刷発行
歎異抄	金子大栄校注	岩波書店	1986年3月20日	発行
選択本願念仏集	大橋俊雄校注	岩波書店	1999年9月6日	発行
新潟県史 通史編2				
新潟市史 通史2				

参考文献

- (1) 恵心尼消息 五
- (2) 恵心尼消息 三
- (3) 親鸞とその妻の手紙 石田瑞麿 春秋社 2000年8月25日新装第一刷発行
- (4) 唯信抄文意講義 細川 巖 法蔵館 1998年1月1日初版第一版発行